

(2) 各作物の生産概況

【普通作】

- ・麦：播種は11月中旬から始まり11月下旬が最盛期となった。出芽は概ね順調であった。莖立期は2月上旬から始まった。1月～3月の気温が平年より高く推移したため、草丈が高く莖数はやや多くなった。出穂期は大麦は平年より2週間程度早く、小麦は10日程度早くなった。収穫は大麦で5月14日から始まり平年より6日程度早くなった。小麦も同様に早くなり5月24日から始まった。収量は、大麦品種を「はるしずく」から多収性の「はるか二条」に全面転換したことにより、前年を大きく上回った。小麦は平年より多かった。品質は大麦、小麦ともに1等で良好だった。
- ・水稲：育苗期は、生育は概ね順調であった。田植えは、中山間地は5月中旬頃から、平坦地は6月中旬から始まった。田植後の多雨により浸冠水やオーバーフローの被害が発生し、スクミリンゴガイの食害も多発した。田植え後の低温寡照により生育は遅れ、莖数は少なく、草丈は高い軟弱徒長の生育となった。出穂期は早生品種は平年並み～2日程度遅く、中生品種以降は平年並みであった。成熟期は平年並み～やや早くなった。9月上旬の台風9号、10号の強風による倒伏や籾ずれ、さらに脱水による穂枯れが発生した。また、トビイロウンカによる坪枯れが8月下旬から発生し、中山間地から平坦地までの広い範囲で多発した。収量は穂数・籾数が少なく、登熟期間の日照不足もあり、平年よりかなり少なく、品質も低下した。
- ・大豆：播種は、梅雨の合間の7月中旬と梅雨明け後の7月末～8月上旬に行われた。7月中旬播種の生育は良好で、開花期は8月26日頃と平年より3日程度の遅れであったが、8月上旬播種ほ場の生育は不良で開花期は9月4日頃とかなり遅くなった。台風9号、10号の強風により多くのほ場で倒伏、葉の裂傷及び落花の被害が発生した。病害虫は、ハスモンヨトウの発生は少なかったが、成熟期にミナミアオカメムシの発生が多く吸汁害が発生した。葉焼病は9月中旬頃から発生し、感染が拡大し早期落葉したほ場が見られた。ダイズクキモグリバエの多発が葉の萎凋につながり、生育に影響した。収穫は11月12日から始まり平年よりもやや早くなった。生育不足、及び倒伏のため最下着莢高が低くなったことによる収穫ロスが多く、収量は平年より少なかった。大粒比率は約50%で、品質は大粒・中粒は1等主体であった。

【野菜】

- ・イチゴ：ランナーの発生は例年より鈍く、採苗は遅れ気味であった。育苗時期に降水量が多かったため、発根量が少なく軟弱徒長ぎみの生育となった。8月中下旬が平年より高温であったが、普通作型の花芽分化は平年並みであった。9月上旬に台風が襲来したが、定植は順調に推移した。10月の乾燥傾向と11月の低温により生育は抑制されたが、その後回復し1月下旬までの収量は昨年より多かった。
- ・ナス：夏秋ナスは7月の大雨と9月の台風で根傷みや枝折れ、果実の傷等が発生した。秋口に冷え込みがあったが11月の好天気回復し収量は昨年より上回った。冬春ナスは9月の台風で定植遅れが発生、また猛暑により活着に時間がかかった。その後順調に生育、年内の好天気もあり2月上旬までの収量は昨年を上回った。
- ・トマト：夏秋トマトは梅雨時期が平年より長かったため草勢が低下、その影響により収量は低下した。冬春トマトは、9月中旬を中心に定植が行われ、その後順調に生育し、1月下旬まで収量は昨年を上回った。

【花き】

- ・施設ギク：梅雨明けが7月下旬であったため、6～7月は例年よりも涼しく、高温による開花抑制が発生しなかったことから、7～8月は例年よりも開花は前進化した。7月上旬の大雨、9月上旬の台風による被害を受けた農家もあった。また、コロナ禍で業務需要が減少した一方、家庭需要が増加した結果、盆・彼岸・年末物日用の色ギクやスプレーギクの作付けが増加した。
- ・ガーベラ・草花：令和2年春の緊急事態宣言後の4～5月は、単価急落により出荷を停止し次年度に向けた改植を早める農家が多かった。また改植しない農家でも、株の刈込を行い出荷調整を行う農家も散見された。7月上旬の水害および9月上旬の台風により被害を受けた農家もあった。
- ・シンテッポウユリ：7月の長雨により葉枯病が多発し、共選出荷率及び秀品率は大幅に低下した。

【果樹】

- ・カンキツ：極早生・早生は着花量が多かったものの、生理落果が多く日焼け果の発生も多くなったため着果量は少なくなった。普通温州は表年となった。早生以降は天候に恵まれ、食味は良好だった。
- ・モモ：施設栽培では、暖冬の影響で低温遭遇が遅れ、早期加温では着果が不安定となった。生育期に長雨に遭遇したものの、糖度などに影響はみられなかった。
- ・ブドウ：結実は全作型概ね良好であった。生育期の日照不足によりトンネルを中心に果粒肥大がやや不良となり、一部、糖度上昇に遅延がみられた。
- ・ナシ：開花は平年並みであったがバラつきがあり、一部で結実不良がみられた。果実肥大はやや小玉傾向であった。果実品質は、幸水・豊水ともに平年並みであった。
- ・キウイフルーツ：花腐細菌病の発生で結実数が減少した。果実肥大は7月の日照不足で不良であった。糖度は、平年並み、台風による落葉が見られた。
- ・スモモ：大石早生李では一部で発芽障害があり、露地栽培にて結実不良がみられた。果実肥大と糖度はともに良好であった。
- ・ウメ：開花は平年並みで、結実は品種により差があった。生理障害は少なかった。しかし果実肥大は平年並みであった。

【茶】

- ・一番茶：生葉収量については、4月の低温や少雨の影響により新芽の生育が進まなかったこと、摘採・製茶を見送る降雨日も少なく早摘み傾向となったこと等から、多くの茶園で減少した。荒茶品質については、積極的に被覆が行われ葉色が向上し、うま味を有するものがあつたが、茶期前半は低温により被覆効果が小さく、水色の青みが不十分なものもみられた。
- ・二番茶：芽の生育期間の気温が高く推移したため、生葉収量は増加傾向であった。品質については、色沢良好で形状を残した荒茶の評価が高い一方、露地や赤みを帯びているなどの水色に難がある荒茶の評価は著しく低かった。終盤には断続的な降雨等による摘み遅れにより、大型化したものが増加するとともに、県外の相場も影響しより低調な取引となった。
- ・秋期生育：平坦地を中心に、7月の大雨における湿害と、8月中旬からの高温・干ばつの影響により秋芽の生育遅延が散見された。なお、目立った病害虫の発生はなかった。